

Nami-Aru? / Internet

「ローカリズム」

文：ジョージ・カックル

サーフィンの神様の悪い冗談が、ローカリズムだ。ローカリズムはどこにでもある。飲み屋の常連と一緒に。お店だって、海だって、最初はどこに自分の居場所を見つけていかかわからない。嫌な人間はいろんなところにいるものだ。感じのいいローカルもいれば、感じ悪いローカルもいる。噂によると、車から降ろさせてくれないところさえあるという。車の窓越しから、ここに入るつもりかとプレッシャーをかけてくるらしい。そんなのはバカじゃないかと思うよ。でも、ローカリズムは見方を変えれば重要だとも考えられる。その場所でサーフィンが続けられるのもローカルのおかげだ。誰かが流されれば、助けるのはローカルだし、実はローカルだからこそ、そのポイントのルールを知っていることもある。駐車禁止の場所に停めることや漁港の目の前を横切る行為をやめさせるのも、ローカルだろう。ローカルは波を知っているだけに、どうしても多くの波に乗ってしまう。それは仕方ないんだ。地元なんだから。でもローカルだって、好き放題やっているわけじゃない。顔見知りになって会釈すれば、返してくれるだろうし、年をとってくれば譲ることも多くなる。僕は、そんな様子をよく目にするよ。

それからもうひとつ、勘違いしないでほしいこともある。海に入ってすぐに波待ちしているローカルの奥に行くと、来た波にすぐ乗るサーファーがいるけど、それはどうだろう。一番奥だからって俺の波って思い込むんじゃない、嫌われて当然だ。もしかしたら、そこで30分待っていたサーファーもいるかもしれない。それこそ、空気を読もうよ。もうひとつ勘違いしがちなことは、よく本に板の上に先に立った人に優先権があるって書いてあるけど、さっと立てばいいっていうんじゃない。回りを見ながらゆっくり立つ人もいるんだ。波が一番ピークに近い人のもんだよね。このふたつの掟破りは「スネーク」と呼ばれている。アメリカではドロップインより嫌われる行為だ。

ドロップインというのは、人が乗っている波に乗ることだ。ドロップインを平気でやるローカルもいるけど、それはもちろんよくない。でも、もし知らない顔が来て、何本も波から落ちたりしたら、ローカルはドロップインしてくるよ。その波に乗れないレベルなんだから当然だ。人が乗っているって知らないで、ドロップインすることは、女の子につきあっている男がいるって知らないで誘っちゃうのと同じことだ。まあ、1回ぐらいは許されるかな。知っている誘うのはドロップインだ。

海外のポイントで、見知らぬローカルに優しくされたって話や、海から上がって一緒に酒を飲んだって話を雑誌なんかでよく読むけど、その気持ちを忘れないでほしい。自分たちも日本に帰って同じことができたらいいよね。サーフィンのいいところは、見知らぬ国へ行ってもお互いサーファーだってわかれば海じゃなくても声を掛け合うし、話しが盛り上がることもある。その気持ちを海まで持っていこうよ。

僕は昔、サンフランシスコのフォート・ポイントに週に4回ぐらい入っていたんだけど（ということは、僕はローカルだったんだろうね）、そこは駐車場からポイントがすごく近くて、車からでも波待ちしているサーファーと話せるほどなんだ。ある日、僕は知らない車の隣にパーキングしたとき、車のドアがパタンって隣の車の当たってしまったんだ。アメリカじゃ大して気にしないことなんだけど、そいつはすごい勢いで怒鳴ってきた。あんまりしつこく文句を言うてくるんで、僕はごめんって一回謝ったきり無視していた。そんなところに、海に入っているサーファーたちが僕に向かって何人も声を掛けてきたんだ。その様子を見た隣の車の男

は、「あ、やばい」って顔をしてスッと車を走らせて帰ってしまった。うかつだったんじゃないかな。自分で自分の首を締めた。そんなに文句をいわなきゃフォート・ポイントに入れたのに。大事なのは、リスペクトだ。ローカルもローカルじゃないサーファーも、ね。